

かわさき区の宝物シート

宝物No.	でんじゅうろうもも 伝十郎桃		
29-6			
エリア	全域 —	シーズン —	通年 —
目的	<input checked="" type="checkbox"/> 観る <input type="checkbox"/> 遊ぶ・体験する <input type="checkbox"/> 食べる <input type="checkbox"/> その他		
宝物定義	<input type="checkbox"/> ものづくり <input type="checkbox"/> イベント・祭り <input checked="" type="checkbox"/> 味づくり <input type="checkbox"/> にぎわい <input type="checkbox"/> 現代の文化的なもの <input type="checkbox"/> 港めぐり <input checked="" type="checkbox"/> 歴史的なもの <input type="checkbox"/> 人物		
所在地	幼木のある学校及び事業所は下記参照		
問い合わせ	NPOかわさき歴史ガイド協会		
TEL	044-221-9117		
FAX	044-221-9117		
E-mail			
URL			
交通			







左上：接ぎ木される伝十郎桃の枝
 右上：春の若葉（写真提供：渡田小学校）
 左下：冬芽
 右下：記念碑（大島八幡神社境内）

基礎情報

■伝十郎桃は、維新後の明治から大正初期にかけて川崎区大島にて生産されていた川崎発祥の桃である。現在流通する白鳳などの桃のおもとの品種の一つであるが、大正から昭和に起こった急速な工業化により川崎から姿を消していった。

■平成22年(2010)、その伝十郎桃が、川崎市内の小学校と川崎市農業振興センターの協力により、川崎市立殿町小学校、渡田小学校、向小学校、田島小学校、東大島小学校、藤崎小学校で接ぎ木され、その後、平成24年(2012)には、宮前小学校、小田小学校、京町小学校、京町中学校、昭和電工川崎事業所でも接ぎ木されたことで、無事川崎に“帰郷”した。

由来・エピソード

■代々農業を営んでいた吉沢家では、明治維新後、農閑期に副業として桃の栽培を手がけていた。父の伝十郎から家業を継いだ寅之助は、栽培とともに品種改良について研究し、明治19年(1896)、土質や気温を選ばず、樹勢がよく病虫害に強い新品種「伝十郎」を開発した。伝十郎は大型で色艶よく、甘味酸味を兼ねており、従来の外国種に比べて良質であったことから、果物同業組合が組織され、東京神田や横浜にも出荷されたという。出荷場所となった大島八幡神社には、伝十郎桃の記念碑が設置されている。

■明治43年(1910)、寅之助はさらに伝十郎桃を改良し、早生種「橘早生」をつくり出した。当時、その収穫時期の早さから、画期的な品種であると評判を呼び、要望のあった全国の農家に配布した。その後各地で品種改良や交配の材料としても使用され、様々な品種が生み出されている。例えば現在でも各地でつくられている「白鳳」は、中国産とされている「白桃」と「橘早生」を掛け合わせたものである。ほかにも福島県の「あかつき」など、現在でも橘早生がそのおもとなつている品種が数多く流通している。

■伝十郎と橘早生の最盛期は明治29年(1896)から大正6年(1917)の21年間であった。その後工場進出による桃畑の減少や農家の減少の影響から、徐々に生産量が減っていった。やがて川崎の港湾一帯は京浜工業地帯の中核となり、市街地化が進むにつれて農地は無くなっていったという。

■平成21年(2009)から川崎市が伝十郎桃の栽培を模索し始めた。初年度はいずれも接ぎ木に失敗したが、翌年には農林水産省の研究機関から幼木を取り寄せて再挑戦した。川崎市農業振興センターの職員らが平成22年(2010)4月中旬、各校で以前からある桃の木やその苗木など計6本に「伝十郎桃」を接ぎ木。無事に葉が付き、各校の職員や児童らにより大切に育てられている。

■平成25年(2013)6月、藤崎小学校の接ぎ木した部分から4個の実がなり、同年7月には「伝十郎桃の復活を祝う会」が開催され、児童や教職員、多くの来賓らによって結実が祝われた。

補足・その他

接ぎ木された伝十郎桃の幼木がある小中学校及び事業所
 殿町小学校、渡田小学校、向小学校、田島小学校、東大島小学校、藤崎小学校、宮前小学校、小田小学校、京町小学校、京町中学校、昭和電工川崎事業所

関連シート